



THE KAGOSHIMA
UNIVERSITY MUSEUM

Newsletter

NO.1

JUNE 2001



表紙説明

垂水市牛根麓から見た桜島と鍋山火口（溶岩の後に見える台形の山）。「続日本紀」の天平宝字八年（764年）十二月の箇所に記述された噴火によって形成された三島は、一部の学者によって隼人町沖の隼人三島と考えられていた。しかし、本間不二男（1935）、小林哲夫（1982）は、天平の噴火がこの鍋山で起こり、その時の溶岩が鹿児島湾の海に達したと報告した。

館長挨拶

大塚 裕之

平成13年4月、鹿児島大学に総合研究博物館が設置されました。この設置は、先発の6つの大学博物館（北大、東北大、東大、名古屋大、京都大、九大）に次いで7番目で、新制の国立大学としては最初のものでした。

平成13年度の概算要求に対して、2つの研究系（資料研究系と分析研究系）および5つの定員（全て振り替えで、純増なし）が認められました。教官配置は、資料研究系：教授1、助教授1、助手1；分析研究系：教授1、助教授1です。館長は私、大塚裕之（理学部教授、地質学・古生物学）が選出されました。博物館は将来、郡元キャンパス内に建設予定ですが、現在は既設の建物に仮住まいの状態です。数年後の建物の建設を目指し、努力しております。

鹿児島大学には旧制七高や高等農林学校以来、半世紀以上にわたって、南九州から南西諸島を経て東南アジアや太平洋諸島へ至る広範な地域から収集された、総計135万点以上の貴重な学術標本が集積されています。それらの代表的な標本は、植物、昆虫、岩石、化石、黒潮海域の水産動植物などの自然系学術標本、考古学、民族学および発掘された人骨などを含む人文社会系の標本、その他の学術標本からなります。これらの学術標本には、再度採集できない絶滅種や絶滅危惧種、さらに生物進化の研究上重要な南西諸島地域の化石標本、考古学資料等が多く含まれ、学術上重要な意義を有しています。しかし、これまでに、これらの資料・標本は各

学部の研究室等に分散して保管され、その保全・管理の体制が貧弱でした。さらに教育研究にも有効に活用されておらず、社会的に公開するのも困難な状況にありました。

この総合研究博物館の設置によって、

- 1) 学術資料を使つての実証的教育を実現させるために、学生が利用しやすいように、学術標本を良好な状態で、整理・管理・展示公開する。
- 2) 従来の学問分野のみならず、学際的分野さらに異分野からの学術標本の利用要請に応えるために、学術標本の収集・維持・管理・保存情報提供を一元的に行なう。
- 3) 大学と地域との連携を強化する意味でも、住民への学術標本の公開展示、公開講座、講演会の開催を行ない、開かれた大学としての使命を果たす。
- 4) 国際的に情報を公開することで、国際的な学術標本の相互利用・交換を促進し、また学術標本の受・発信の西南日本における中心としての役割りを担う。

などの目標達成に努力いたします。皆様の御協力をお願い致します。



サツマハオリムシ (*Lamellibrachia satsuma*)

ハオリムシ^{えら}は、鰓から体内に取り入れた硫化水素などの無機物を、栄養体と呼ばれる器官に共生する硫酸化細菌が有機物に変え、その有機物を活動エネルギーとして生きている。ハオリムシは深海から報告されていたが、1993年に海洋科学技術センターの調査船「かいよう」によって、鹿児島湾奥部の水深80m前後の海底からそびえる山の頂上付近から採取された。世界でもっとも浅い海底噴気孔付近に生息するハオリムシは、1997年に三浦知之・塚原潤三（鹿児島大学）・橋本 惇（海洋科学技術センター）氏によって新種として記載、報告された。現在、鹿児島市の「かごしま水族館」で飼育公開されている。

組織



運営委員会委員

大塚 裕之 (総合研究博物館館長、委員長)
 新田 栄治 (法文学部)
 八田 明夫 (教育学部)
 山根 正氣 (理学部)
 平川 忠敏 (医学部)

長岡 英一 (歯学部)
 高橋 武重 (工学部)
 櫛下 町鉦敏 (農学部)
 鈴木 廣志 (水産学部)
 総合研究博物館：大木公彦、内木場哲也
 橋本達也、福永しげ子

教職員プロフィール・抱負

館長

大塚 裕之

(OTSUKA Hiroyuki)



理学部地球環境科学科地質科学講座の専任教授で、専門は地質学および古生物学です。スタッフ一同は、世界にも誇れる大学博物館を目指すとともに、この博物館が本学の将来にとっても、地域社会にとっても、意義ある博物館となるように、努力する所存です。この新しく出来た鹿児島大学総合研究博物館をぜひ応援して下さいませにお願いいたします。

専任教官

大木 公彦

(ŌKI Kimihiko)



資料研究系 教授 地球科学を専門としています。その内容は、人類が地球上に姿を現わした過去400万年の間に堆積した地層の堆積環境と構造発達史を明らかにすることです。さらに、現在の海底に堆積している表層堆積物とその中に含まれている“星砂”の仲間達、底生有孔虫群集の解析を行なって堆積環境との関係を調べています。最近では、人類の活動による環境の変化を海底表層堆積物と底生有孔虫から捉える研究を行なっています。

私たちの住む大地、それを取り囲む海で起こっている様々な自然の営みを明らかにするためには、現場での観察、標本を含めた様々な資料の蓄積が必要です。大学から社会に開かれた窓として、多くの分野の研究者達が蓄積してきた、

膨大な研究資料や貴重な標本に関する情報を、総合研究博物館から発信できればと思っています。

橋本 達也

(HASHIMOTO Tatsuya)



資料研究系 助教授 専門は考古学です。とくに弥生時代から古墳時代における技術革新と地域間交流の問題、そしてそれらによる社会変革について東アジア世界での位置づけを視野に入れながら研究を進めております。

鹿児島へは今春来たばかりで、まだまだわからないことだらけですが、非常に個性豊かなフィールドであり、興味を持って研究に取り組みたいと思っています。また、博物館という開かれた大学を目指す組織の一員としてより積極的な企画が出せるように心がけたいと思っています。

福永 しげ子

(FUKUNAGA Shigeko)



資料研究系 助手 大学博物館というと、堅苦しいイメージがありますが、新たに住民の皆様と集い、大学に眠っている学術標本や資料を呼びさまし、ともに感動しあえるような場所を提供するような博物館づくりをめざします。同時に保存情報の発信基地となりうるようつとめします。

教職員プロフィール・抱負

専任教官

内木場 哲也
(UCHIKOBA Tetsuya)



分析研究系 助教授 新たな人的交流から研究(生物資源学と生化学分析)の幅が広がりつつあります。博物館の業務を常に広く捉えるとともに、ここが人類や地球環境の将来に貢献する場でありたいと考えます。例えば豊富な標本のDNA分析とその情報を基にした創薬、全国でも稀な生化学技術資料の収集と展示など、夢は尽きません。

研究支援推進員

桑山 龍
(RYU Kuwayama)



現在は主に、1)日本産現生カエル類の骨学的モノグラフの作成、2)琉球列島産カエル類化石の比較骨学的研究、3)日本産現生カエル類の分子系統学的研究を行っています。研究・教育を行ってきた大学と学問の一般普及を目指す博物館が統合された大学博物館は、今後、学問を発展させていく上で不可欠な存在です。鹿大に眠る135万点の貴重な学術標本が多くの一般人や研究者に公開・利用され、社会のために少しでも貢献できるよう力を尽くしていきたいと考えています。

もう1名の専任教官(分析研究系)については公募の予定

表紙とサツマハオリムシの写真・説明文は大木公彦による。

詳しくは、大木公彦「かごしま文庫 61 鹿児島湾の謎を追って」春苑堂出版を参照。



事務担当

木塚 建一
(KITSUKA Kenichi)



4月に琉球大学から赴任しました。着任してすぐに総合研究博物館の設置となり、色々な面で手探り状態でしたが、なんとか看板上掲までございつけました。今後は、博物館教官と事務部の共同作業で九州一いや日本一の総合研究博物館にしたいと夢を抱いております。

研究協力課

課長	木塚 建一	共同利用係長	西郷 博志
専門員	住吉 重之	主任	吉留 悦子
研究協力係長	猪俣 三郎	事務補佐員	八丸 理絵
主任	上赤 佳代		

お知らせ

近く博物館兼務教官・協力研究員を募集する予定です。皆様方の積極的なご協力をよろしくお願い申し上げます。

今後の博物館行事計画 (予定)

8月下旬 「甲突川自然体験ツアー ―流域をめぐり防災を考えよう―」

対象:主に小5、6・中学生と保護者

10月上旬 総合研究博物館オープニングセレモニー

○公開講座 「^{いざな}大学博物館への誘い」 対象:一般市民
○公開プレ展示 「古代からのおくりもの―鹿大に眠る遺跡―」